

別の歴史に見合う言葉を見つける

ナラティヴ・セラピーの詩学

小森康永, 森岡正芳,
マリヘレン・スナイダー, 岸本寛史著

北大路書房, 四六判 292頁, 4,400円, 2026年1月刊

(立正大学) 安達映子

ナラティヴ＝物語は経験や人生に意味を与える一方で、わかりやすさと連続性のもとに人々を拘束する——そのことへの警戒や懸念が昨今多く語られるようになった。本書はこうしたアンチ・ナラティヴの声にも耳を傾けながら、ナラティヴ・セラピーがその先に向かうものであることを詩学として論じようとする意欲的な一冊である。

ナラティヴ・セラピーはアンチ・ナラティヴな実践である。一見矛盾めいたこの言い方は、一部の読者を混乱させるかもしれない。思い返すべきは、ナラティヴということばが「物語 (story)」と「語ること (telling)」の分かちがたい循環こそを名指すという点だ。アンチ・ナラティヴとは反・物語、すなわち物語化への抵抗だが、イントロダクションにあたる第一章で森岡が言及するように、そもそもナラティヴ・セラピー／アプローチは「出来事の直線

的なストーリー化」を目指してきたわけではない。ナラティヴのもう片側である「語ること」が「物語」からこぼれすり抜ける可能性、「語ること」に「語られないこと」がつけに伴う重層性、むしろ目はそこに向けられてきた。だからこそマイケル・ホワイトは自分の聴き方にじっくりくるものとして「詩学」をあげていたのだろう (はじめに／第三章)。こうして「語ること」の側、すなわちナラティヴの実相は、本書において「ポエトリー／詩」を引き寄せることで力強く探求されていく。

ナラティヴとポエトリーの関係性、あるいは「ナラティヴの詩学」の総体について、とはいえ収斂的で明晰な議論がかならずしも展開されているわけではない。起点といえるスナイダー論考 (第二章) はポエトリーをナラティヴ・セラピーのメタ・メタファーとして構想するが、はたしてポエトリーはナラティヴを包摂する上位概念といえるのか。これを受ける他の書き手たちも、ポエトリーをストーリーに至る以前の基底だととらえる立場を示唆したり、ナラティヴを駆動するものとしてポエジーを想起しつつもナラティヴとポエトリーの二項区分は回避しようとして視点は散らばる。換喩と隠喩の対比が本書の詩学においては斬新かつ中心的なテーマの一つになっているが、ここでも両者の違いを鮮明にするというより、ゆるやかな連続性が許容されている。事例と詩を文章の流れに織り込みながら、どの論考も水のように自在で、正解を急ぐ素振りをみせない。

けれども、執筆者間の、あるいは執筆者自身の揺れやズレや定まらなさ、本書において難点ではなく魅力なのだ。読者はその隙間を縫い自分に届くことばを探りはじめる。そしてふいに、この本がもつ豊かな再帰性に気づかされる。人々の語ることを詩として聴けというのなら、この論考集という散文もまた詩として読めるのだと。そう得心したとき、たとえば第五章で岸本が記す「プライマリー・メタファー」や第六章で小森が主題化するホラーが、評者にはポエトリーであるところのナラティヴの、身体性をめぐる景色として鮮やかにひらけた。

そして本を閉じる時、ここまでの時間がナラティヴ・セラピーの「別の歴史に見合う言葉を見つける」旅であったと思い至る。その腑に落ちて満ちる感触は読書の歓びだろう。